



ダンチヤン と ホッホチヤン

桑原素子 花  
桑原仙齋 文

花とダンチヤンとホッホチヤン 桑原素子 桑原仙齋 文

桑原専慶流家元



# ホッホチャンとケンチャン



ホッホチャンとケンチャン (2004年2月 親子撮影)

桑原素子花 桑原仙齋文

桑原専慶流家元

長らくテキスト(流誌)に続けてきた「ホッホチャンとケンチャン」は、素子(ホッホチャン)と孫の健一郎(ケンチャン)の会話から生まれた、いわば「花遊び」のスケッチである。そして、その「花遊び」を通じて、いけばなに深い関心を持ってもらいたかったのである。

健一郎は三才になった頃から、素子にいけばなを習いはじめた。稽古場に入ると同席の皆さんにご挨拶させ、花の名前、どんな形にいけばいいのか教えるのだが、子供が受け入れやすいように説明するのは難しいことである。時にはきびしく躰けられていたが、それでも健一郎は風邪をひいたときぐらいいしか休んだことがない。そして教えられたことはかなり前のことまでよく覚えている。

この本の表紙に使った「ブーツと薔薇」、そこで「このブーツで花を踏んづけては駄目」と云われた四年前のことをしっかりと頭に入れていたらしい。今、夏休みで岡山の私の妹の家に、母子三人で泊まりに行っているが、そこで弟が、庭の花を踏みつけそうになったとき、大声で「花踏んだらアカン」と叫んだそうである。妹が感心して電話で話してくれた。

この本は、素子が生前、「私が死んだら、一冊にまとめて皆さんにお配りしてね。」との願いで作った。

一作一作が私にも素子にも、それぞれに思い入れがある。素子が健一郎との会話の中から、その時の興味を抱いていることに目をつけ、それにどんな花をとり合わせようか相談しながら一作づつでき上がっていった。二人のイメージをスケッチしたもので、いけばなになってはダメと云っていた。健一郎は自分の提供した絵や工作、オモチャ、そんなものがどんな写真となっていくのか、撮影の時は、いつも横で、頬杖をついて見つめていたり、カメラの宇佐美さんのまわりでウロウロしたりしていた。

発病から三年間、辛くてたまらない日もあっただろうが、皆さんへの責任感の強さで、二〇〇四年の九月号の写真まで作って逝った。

「ホッホチャンとケンチャン」の頁は「スパイダーマン」で最後になった。

ケンチャンのために作った頁は、一九九六年からのもの入れると五十以上になる。その約半数をまとめたのがこの一冊である。

絵には童画がある。文学には童話、音楽には童謡。いけばなにも子供が何かを想像し、心をふくらませるようなものが、あつてほしい。御愛読下さった皆様に御礼申し上げますとともに、素子の冥福を祈らせて頂きたい。

二〇〇四年 八月十五日

桑原 仙齋

## ケンチャン チョットかしてくれる

一九九九年 五月

二才半のケンチャンと、ホッホチャンがこのボールで遊んでいる。まだまともにキャッチボールはできないが、投げることはできる。ホッホチャンはケンチャンの投げたボールを拾い集めて渡すだけの役だが、何が楽しいのか、二人とも賑やかに笑いながら一時間近く遊んでいた。

そのうちホッホチャンはボールを手にとつて、ためつ、すかしつ眺めはじめた。何かを目論んでいるらしい。

ホ「ケンチャン、このボール暫くホッホチャンに貸しといてくれる？」  
ケ「——？」

と、ただニコニコしている。そして

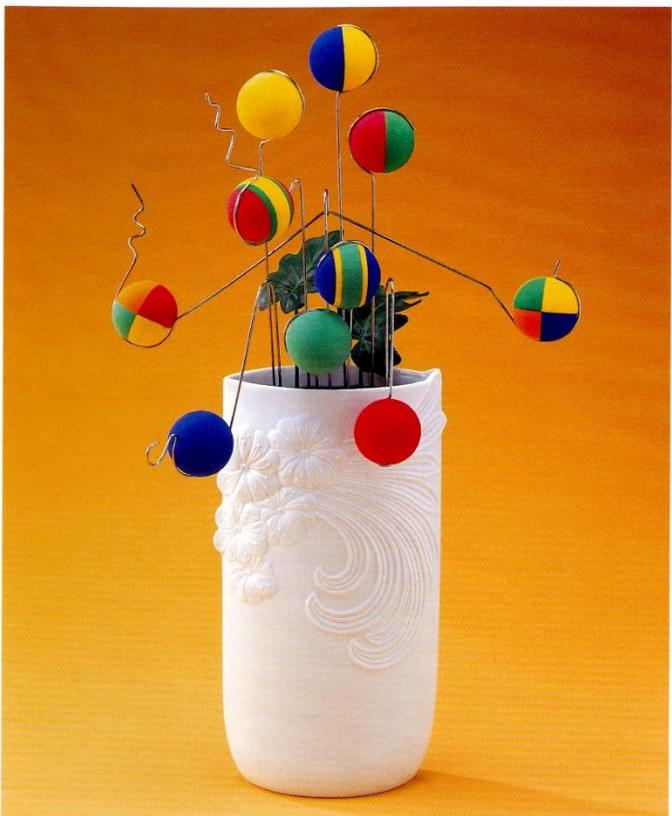
ホ「オジイチャマ、このボール、ステンレスの針金にとりつけられな  
い？」

と、ということで、針金につけたボールは白い扁壺に挿され、クツカバラの葉がそえられた。

ケンチャンが投げたボールが跳びはね、ころがる様子をスケッチしたような花である。

クツカバラの葉は、ホッホチャンとケンチャンの手なのだろうか。

花材 クツカバラ





花材  
バラ

## かたこと 片言の会話から

二〇〇〇年 十二月

ホ「このお靴、大事にはきましようね。そしてね、このお靴で道端に咲  
いているお花さんや、小さな虫さんを踏んづけたりしないようにね」  
ケ「わかったー、そんなことさえへん」

ほんの少し話らしいことができるようになったケンちゃんに、ホッホ  
ちゃんは夢中である。

無理もないだろう。六十才代半ばになって、初めてできた孫なのだか  
ら。

このブーツはケンちゃんへのクリスマスプレゼントである。

そのブーツにホッホちゃんはリボンと薔薇を買に行った。リボン屋さ  
んで、弟のジュンクンは階段からころげ落ちた。ホッホちゃんは、あわて  
て抱きおこしたが、ジュンクンはケロツとしていた。

多分ケンちゃんは、ジュンクンの小さな人生に、ホッホちゃんから教え  
られたことを、分け与えてくれることだろう。

## 目を輝かせて

二〇〇一年 一月

ケ「ホッホチャン！ これ今日御所でとってきてん！」

ドングリを拾ってきたケンチャンは目を輝かせて報告。通っている幼稚園から京都御所は近い。時々先生が連れて行ってくれるそうである。

ホ「へえっ、こんなに沢山くれるの。有り難う。」

ケ「チガウツ」

ホ「フーン、お礼言うて損した」

ケンチャンはホッホチャンの顔を見上げている。

ホ「チョットだけやったら、あげてもええけどー」

ケンチャンはドングリに夢中。

ホ「これ使ってお花にしてやりたいけど、減ったら可哀そうやし・・・」

そこでホッホチャンとオジイチャマは、御所へドングリ拾いに。

実付きのユーカリの枝に、鼠をつけて、拾ってきたドングリの実を撒いて

ホ「こんな花やったら、ケンチャンにも親しみを持ってもらえるのと違うかな」

出来上がったのをケンチャンに見せて、

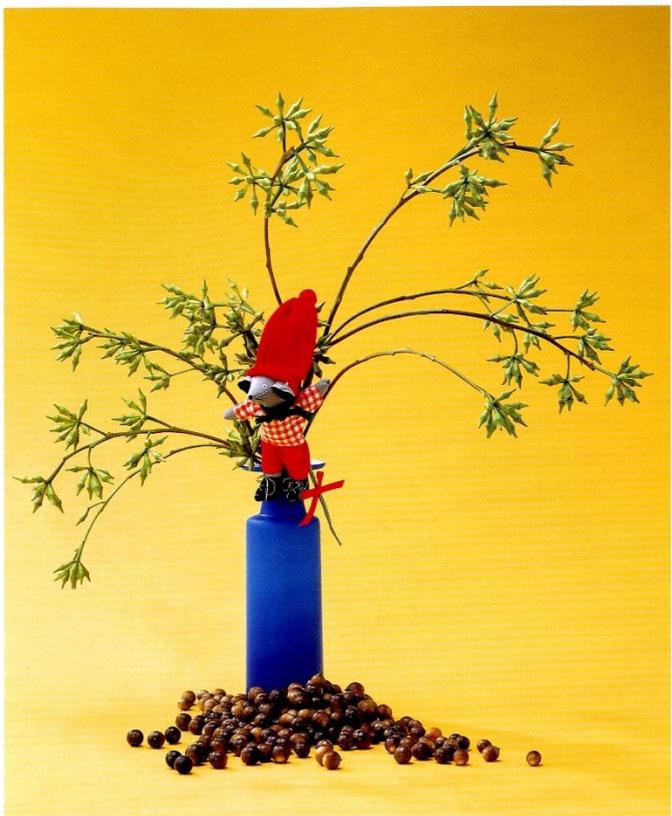
ホ「あんたネズミ年。知ってる？ サクラさんも、曾祖父さんもそうなの。

ジュンクンはトラ年。」

ケ「フーン」

弟の方が強そうな干支なのが気になるらしい。

花材 ユーカリ ドングリ



## おハナのシユリケン

二〇〇一年 三月

ホッホチャンが健一郎に聞きました。

ホ「今日幼稚園でどんなこと教えていただいたの？」

ケ「シユリケン！」

ホ「エッ？ シユリケンのことでしょ。そんなこわいもの」

ケ「折紙でつくんねやけど」

ホ「そんならわかるけれど、それ綺麗なの？」

ケ「キレイや」

ホ「そんならホッホチャンにも作ってくれる？」

ケ「タクサンか？」

ということで折紙で十字手裡剣を作ってくれました。でもホッホチャンは沢山ほしがったので、ママにも手伝ってもらって綺麗なのが三十コもできました。

手裡剣は男の児の好きな武器である。私も子供の頃シユリケン遊びをした。本物の、日本刀の鞘に付いている小柄も持っていたが大変鋭利なもので遊びには使えなかった。

二色の折紙で作った十字手裡剣は造花より感じがいい。細い針金の足をつけてやると、スウィートピーのほのかな甘い香りにひかれて飛んできた星のようにも見える。

花材 スウィートピー



## 蒸気機関車

二〇〇一年 四月

ホッホチャンの部屋で健一郎が植物園で撮った写真を見ている。

ホ「この写真、オジイチャマとホッホチャンと三人で植物園へ行った時の。覚えてるっ。」

ケ「……？」

暫らく見ている小さな声で

ケ「覚えてるう……！」

うる覚えらしい。

ホ「暖かくなってきたし、お花も沢山咲いているし、又行こうか」

ケ「ケンちゃんお花好きや」

ホ「バラの花の匂い嗅がせてあげたでしょ」

ケ「ウン、バラええ匂いや」

ホ「バラはケンちゃんが始めて覚えた花の名前ね」

ということ、今度は順之助も連れて、櫻子伯母ちゃんの作ってくれたお弁当を持って、和則伯父ちゃんが植物園まで送ってくれました。

機関車トーマスの絵のお弁当箱

ホ「ケンちゃんこんな汽車に乗ったことないでしょ。電車や飛行機には乗ったけどね」

ケ「乗りに行こ」

ホ「ん——」

ケ「あかんか？」

孫達は石炭を焚いて走る蒸気機関車のことをどんな風に想像しているのだろう。

花材 ポリアンサ ラグラス



けんいちろう たいしょう  
健一郎の大将さん

二〇〇一年 五月

ケ「ホッホチャン、これあげる」  
ホ「え、ほんど」  
はな「へエーッ、それおととい園田のおばあちゃんに買って頂いたばかりのアギト（仮面ライダー）でしょ。いいの」  
ケ「ふん——」

このアギトは売り出されたばかりの新製品で健一郎がほしくてたまらなかつたものだからである。

素子は感激した。飾り棚の一番見えやすいところに立てていると、はながまだ健一郎の年頃だった頃が想い浮かんだりする。

見つめているうちに、健一郎にとって仮面ライダーは大将さん（端午の節句の）らしいと気付いた。

そこで端午の節句の花菖蒲に仮面ライダー・アギトをとり合わせてみたくなったのだが、この二つだけでは物足りない。

それでは何かないかと探してもらって出てきたのが健一郎が去年（二才）幼稚園で作った鯉登りである。

花をいけることに専念してきた素子の花菖蒲、息の長い商品として完成されたアギト。そこに幼い手の作った鯉登り。

この三つの間には大きな落差はあるものの一体化させてみると、それぞれの生きる時代とその社会、生きて行く事に深い興味を感じさせる。

花材 ハナシヨウブ



あさがおし  
朝顔知ってる？

二〇〇一年 八月

ホ「ケンちゃん、このお花は朝顔。見たことある？」  
ケ「？……」

横からはなが

ハ「去年ベランダで咲いてたでしょ。覚えてないかなあ。」

ケンちゃんは思い出そうとしてるらしいがうまくいかない。

ホ「朝顔はね、毎日朝になったら咲く夏の花。そしてね、朝顔の咲く頃が祇園祭。去年祇園祭の時至町通の夜店でヨーヨー釣りましたよ。」

ホッホちゃんはケンちゃんに朝顔と夏をうまく関連付けて教えたようである。

ケ「ソんなら僕も祇園祭のとき朝顔いけたげるえ。」

ホ「ケンちゃんにはまだ一寸むつかしいかな。」

私が朝顔のいけ方を先代に習ったのも祇園祭の頃である。

夕方庭の朝顔の中から翌朝咲きそうな蕾をつけた蔓を五十センチほど切りとり、竹籠に四十センチぐらいの枯枝を挿して、それに朝顔の蔓をからませる。花や葉はバラバラの方向を向いている。「これでいいのや。但し見るのは明日の朝」

先代の云うことに間違いはないと思いつつ翌朝見に行くと花や葉はちゃんと向き直っていい姿におさまっていた。いつか健一郎にも…。

花材 アサガオ



## お月見

つきみ

二〇〇一年 九月

ホ「もうすぐお月見ね。ケンちゃんどこで見せてもらおうかな」  
ケ「ウン来て、ホッホちゃん泊まってくれる？オジイチャマも。お月さんは僕のこと好きやねんて。こないだ園田のおぼあちゃんとこからの帰り、ずっと家までついてきてくれたええ。」

多分母親のはながそう話してやったのだろう。私達も幼い頃をほっと追憶してしまうような風景である。

ホ「ケンちゃん、お月さんの絵を描いてくれる？」

健一郎は少し考えて

ケ「よう描かんわ」

ホ「ただ丸を描いたらいいだけなのよ」

彼はまだ考えている。丸を描いただけでお月さんになるのかどうか。頭の中に色んなお月さんが浮かんだり消えたりしているらしい。一緒に走ってついてきてくれるお月さん。丸くなったり雲の間にかくれたり。

でもホッホちゃんに云われた丸いお月さんを描いてくれた。

ただし五つ。

どうして五つなのか、そして左下のお月さんが二重である理由もわからない。

次の十五夜は多分十月一日だろうと思う。できれば十一階の健一郎の部屋で一緒にお月見ができればいいのだが……。

花材 ススキ クリ



## 幼児↓少年

二〇〇二年 一月

先日孫達二人を七五三参りに連れていった。帰り道両親と弟とは別に、ホッホチャンと健と健一郎の三人でイノダへお茶をのみに行った。

驚いたことに、日頃手におえないほど横着なケンチャンが大人びて私達と一人前みたいな顔で楽しく会話できるようになっている。

その日は僕も五才、という自覚、そして私達も二、三才の幼児扱いをしなかったせいもあつたからだろう。

ほしい飲物もメニュー（写真入り）を見せて自分で選ばせ、注文も自分でさせた。

ホ「今日のケンチャンは、もうすっかりお兄ちゃんね。ホッホチャン嬉しいな」

健一郎は真面目な顔で「そうでしょ」と誇らしそうである。幼児期が終つたらしい。

ホ「ケンチャンは次のお誕生日で六才でしょ。そしたらその次の四月から学校へ行くようになるの。少しお勉強はじめようか」

勉強とは一体どういうことなのだろう。でも彼は

ケ「僕勉強する！」

ホ「ケンチャンは賢い子供でしょ。だから色んなこと一杯考えるけど、それをうまく云えないでしょ。何を云ってるかわからないことがあるの」

ケ「そんなことあらへん。なんでわからへんのやろう」

ホ「だから君は勉強しなきゃならないの」

この頁の写真を見ながら質問が続く。

ホ「これはホッホチャンのお友達ウルリカさんの国の馬。ケンチャンと同じ年のアンテ君がいるから一緒にスエーデンに行こうね」

花材 チューリップ



てぶくろ  
手袋ぬいで春よこい

二〇〇二年 二月

ホッホチャンは此頃、チビ共二人を散髪に連れて行くのを自分の役目  
にしている。彼女の好みは短かく刈って前髪を立てるアメリカの海兵隊  
のようなスタイルである。

夏なら紺色のTシャツ、冬にはデニムのシャツがよく似合う。

散髪屋は百貨店の子供用品売場の欲しいものだらけのフロアーにある  
ので、散髪に連れて行ってもらうのを嫌がったことがない。

今日ほしかったのは、ピースマークの手袋。その日の夕方、

ホ「ケンチャン、この手袋をホッホチャンのお花にとり合わせたいか  
ら今晚貸してくれる？」

ケ「明日幼稚園に行くまでやったらええけど」

ホ「明日はお休みやないの。そんなら今晚は泊って手袋はめて寝た  
ら？」

ということで許可がおりた。手袋にそえられたのはアネモネと菜の  
花。そしてケンチャンの知っている花の名前に枝垂柳が加わった。だが  
幼稚園の行き帰りに植わっている枝垂柳とは関連付けて考えられないみ  
たいである。

幼稚園は堀川通に面している。川沿いに多い枝垂柳とチビ軍団。ホッ  
ホチャンのいけたこの花に、そんな意図はなかったのかもしれないが私  
にはそんな想いが浮かぶ。



花材 シダレヤナギ アネモネ ナノハナ

オウム貝・デンデン虫・ワニ

二〇〇二年 六月

丁度鸚鵡貝にこの花をいけ終ったときに健一郎がやってきた。

ケ「ワーツ、大きなデンデン虫やなあ……」

寝ころがって頬杖をついて見入っている。

ケ「ホッホチャンがとってきたんか？」

ホ「そうや」

ケ「へえーッ、こんな僕ようつかまえんわ。こわいもん。」

ホ「弱虫ッ。そんなこと云うてたら駄目」

ケ「このチツチャイデンデン虫のお父さんか？」

ホ「そっ、強そうでしょ。でもこの小さなデンデン虫はワニさんより弱

いかな？」

ケ「そんなことあらへん。僕かて強いもん」

いつの間にか小さなデンデン虫になったつもりでいる。そして立ち上がってこの頃習い始めた空手の型を披露してくれる。

どうやらホッホチャンのいけたこの花の意味は自然に伝わっているようである。

ホ「これはね、本当はデンデン虫ではなくて鸚鵡貝というの。この貝殻の中に鳥賊みたいな足の沢山あるのが住んでいるの。そしてね、ケンチャンのお母さんが小学校の頃、ニューカレドニア島の水族館で一緒に見た鸚鵡貝なの。地球儀のこの辺の海の中にいるの」

健一郎は小さい地球儀の罌粟粒ほどのニューカレドニアを見つめてい

る。何考えてるのかな。

花材 セラニウム



たなはた  
七夕さん

二〇〇二年 七月

ケ「オジイチャマ、七夕さんの紙作って。」

ジ「へエー、幼稚園に持って行くの？」

ケ「ちがう、ホッホチャンと七夕さん作んのや。」

そこで私の持っている色々な紙を見せたらカラーシートがいいという。たしかに普通の色紙より健一郎には魅力があるだろう。

ホッホチャンと健一郎の七夕さんなら既成の飾りつけでなくてもいいだろう。カラフルな短冊を作って二人に渡したら、ごらんのような七夕飾りができた。

ホ「キレイでしょ。霞草がお星さんみたいに見えるでしょ。空の上にはね、天の川と云ってね、小さなお星さんが沢山集まって川みたいに流れてるところがあるの。そしてね、七月七日の夜に牽牛様と織姫様が天の川を渡ってお会いになるの」

ホッホチャンは色々と天の世界の美しいお話しをしている。健一郎は二人の七夕さんを見つめている。

そしてひととき機械仕掛の宇宙の怪獣のことを忘れていたようである。

ホ「ケンチャン、あなたの名字は星でしょ。だからお星様のことを学校へ行くようになったらよく勉強して、ホッホチャンに教えてね」



花材 カスミノウ



## ピエロとお月見しました

二〇〇二年 九月

ホ「ケンちゃん、ピエロ知ってる？」

ケ「そんなもん知ってる！ 本で見たもん」

ホ「本物見たことないでしょ。サーカスに出てくるの。京都にもこないかな？」

ケ「ホントにいるのっ」

ホ「これはね、そのピエロのお人形。チェコという国のプラハという町のお人形屋さんで買ったの。ね、こうやって糸を引っぱると手も足も動くでしょ」

ケ「欲しいな、くれへん」

ホ「ダメ、これはね、ホッホちゃんの大事なお人形なの」

ケ「フーン、あかんのか」

ホ「それより、もうすぐお月見でしょ。プラハでピエロさんと一緒にお月見したらどんな感じかな」

ホッホちゃんはプラハ（チェコ）の陶製の家を並べてマグカップに菊（ボリス・ベッカー）をいけてお月様を浮かび上げさせました。そこへピエロがとび出してきました。

ケンちゃんは出来るだけおとなしく眺めている。

ホ「ね、ケンちゃん、こんなのに楽しめるの楽しいでしょ。でももうそろそろ眠いでしょ。寝る前にピエロさんと一緒に紅茶飲もうかな、どうする。大分おそくなったけど今日はこれでお終いな。」

花材 ボリスベッカー スモークグラス



## おむすび作って!!

二〇〇二年 十月

ケンちゃんの小さなおにぎり。ホッホちゃんが  
ホ「ごはんまで大分時間があるから、このおにぎり、写真にとつとこうか、どおー」  
ケ「ええけどー、ナンでおにぎりの写真とるの。変なのー」  
ホ「まあ見せて」

ホッホちゃんは威の二階から稲を一束持ってきてきた。そしてその日の朝買ってきた赤のまんま。ケンちゃんは何がはじまるのか不思議そうな顔。そして例によって稲と赤のまんまをいけているホッホちゃんの横で寝そべって頬杖をついて見守っている。

ホ「ケンちゃん、おにぎり好きでしょ。おにぎりは何で作るの？」

ケ「ゴハン！」

ホ「そしたらゴハンは何で作るの？」

ケ「お米！」

ホ「へー、よく知ってるのね。そんならお米は何から作るのか知ってるかな？」

ケ「??？」

ホ「知ちなかつたでしょ。お米はね、これ。稲っていうの。この先に小さな粒が沢山ついているでしょ。この粒の皮をむいたらお米になるの」

ケンちゃんは、おにぎりからお米までのつながりは知っていた。上出来かもしれない。

ホ「写真が終わるまで、オジイチャマの部屋へ行つて、お米ができるまでのお話を聞いてらっしゃい」

ケ「チヨット待つて。この赤いのお花か？」

ホ「これはお花。赤まんま。小っちゃなお米粒みたいでしょ。ホッホちゃんがケンちゃんぐらいの頃、このお花を小さなお茶碗に入れて、はい、お赤飯といつておままごとしてたの。ケンちゃんも、もつと小さいとき、ごはんのこと、マンママッていつてたでしょ。だからこの花は赤マンマ」

花材 イネ アカノマンマ



## お日さまと緑の地球

ひ みどり ちぎゅう

二〇〇三年 一月

ケ「アッ、ここアフリカや」

ホッホチャンに教えこまれてよく知っている。

ケ「アフリカはコワイのやねっ」

ホ「この間もケニアでテロがあって沢山の人が殺されたわね」

ケ「ボク行ったらあかんあ」

ホ「まだ小さいから行かなくてもいいけど、大きくなったら御飯も食べさせてもらえないアフリカの子供を助けに行つてあげてね」

ケ「いーっぱい御飯たべさせてあげる。それからお花いけてあげてもかまへんか」

ホ「ワアアッ嬉しいな。そんな気持があるのやったら、これからもっと一所懸命教えてあげる」

ホッホチャンは毎週ケンチャンにいけばなを教え、毎月子供が興味を持ちそうな花をテキストの十二頁に作り続けてきた。ケンチャンの友達も自分の家に置かれているものと、花と一緒に飾られると興味が惹かれるようである。

大人は床の掛軸の前に飾られた花でいい。だが子供達はウルトラマンや、自分が幼稚園で作った紙の鯉登りに花がそえられるのが不思議らしく、花の名前を聞く。女の子は自然に花に親しんで行くだろうからいいが、男の子にも花に興味を持たせるのは大変な教育の一つである。

花材 ヒマワリ ミリオゲラタス



## 雪はあまり降ってくれない

二〇〇三年 二月

ホ「ユーキやこんこん、アラレやこんこん。降っても降ってもまだ降りやまぬ。犬は喜び、庭かけまわり、猫はコタツでまるくなる」

ケ「へエーッ。ホッホチャンそんな暇言たんか」

ホ「六才頃に覚えたんやと思う。丁度今のケンチャンぐらいのときかな」

ケ「……？、ホッホチャンも幼稚園へ行つてたんか」

ホ「当たり前やない！」

健「郎は又もや」——？——といった顔で考えこんでいる。そのうち

ケ「そしたら友達やっ、……」

思考回路から時間や年月が抜け落ちてしまっているのだから、六十以上も歳月の差のある孫との会話の楽しさはこういうところにもあるのだと思う。

それに「友達やっ、……」とひらめいたとき、どんなホッホチャンを想い描いたのだろう。五、六才の頃の私には、自分の祖父母が幼い時分、どんな子供だったのか想い描くこともできなかったし、想像することもなかった。ただ幼時の昔話を聞いただけのことで終わっていた。健一郎も同じことなのだろう。

ケ「五年北海道のサツポロへ雪祭り見に行つたやろ」

ホ「あの時のこと全部覚えてるかな」

ケ「今度行つたら雪ダルマ作つて雪合戦しよ」

ホ「今年はその時間ないし行かれへんと思う。そのかわりに雪合戦のお花いけたげる。ケンチャンも手伝つてね」

そしてホッホチャンは、どこから三人組の雪ダルマをとり出してきた。健一郎と二人の友達の雪遊びを想像しているらしい。

雪合戦のいけばなを作ろうとはいったものの具体的にどんなものにするのか見当がつかなかったが、二人であれこれ相談しあっているうちに出来上がったのがこのような雪合戦いけばなである。

ホッホチャンはここ二、三年、この真の花を続けているが、それはホッホチャンとケンチャンの日々の暮らしの一齣をいけばなという形でスケッチしたものである。こんなことで健一郎がこの世界の美しさに目覚めてくれればという願い、三才から花をいけることに興味を持ちはじめた彼への贈り物でもある。いけばなは、人と人、人と自然とを、思想や哲学、年令を超えて結びつけてくれるものではないかと思う。

花材 シクラメン



## お花畑作る！

二〇〇三年 三月

健一郎が和則オジチャンのシャツの箱を持ってきた。

ケ「えー箱やな！」とホッホチャンの顔を見ている。

ホ「この箱欲しいの？ でも一体何に使うの？」

ケ「これにお花いけられるやろか？」

ホッホチャンは大喜び。

ホ「この箱、和則オジチャンに貰つていてあげる。それから花をいけるのやったら箱の中に、何か水を入れられるものが要るでしょ。櫻さんに何かプラスチックのお弁当箱みたいなのを探してもらいませよ。それに花をいける間に箱が歪むかもしれないから、オジイチャマに補強してもらおうか」

ケ「そしたら何でもいけられるのんか」

ホ「はあ、何でも」

ケ「いーっばい、いけられるか」

ホ「ケンチャン何いけるか考えてみて」

ケ「去年お花畑へ行ったやろ。百でも二百でもいけられるか？」

ホ「そんなに沢山は無理やけど、お花畑みたいにはいけられる」

ケ「何いけたらええかな」

ホ「そんなら二人で考えませよ」

ケ「僕の間ラッパ水仙いけたやろ。あれあかんか」

ホ「いいと思う。でも水仙だけやなしにほかのもの一箱にいけよう」

ということが素晴らしい大輪のカーネーションと茎付きのスイートピーが加わった。

ご苦労さんなお花畑である。

花材 ラッパスイセン カーネーション スイートピー



## 作つくってあげる！

二〇〇三年 四月

バタバタバタ、と路地ろじをスニーカーで走る小さな足音がして、台所の戸がバタンと開いた。

ケ「ホッホチャン、これ作つくった、あげる！」

ホ「へえーっ、こんなの初めて見たな。どうして作るの？」

ケ「ビーズで作んのや。ビーズを並ならべとして、お母おかあさんにアイロンをかけてもららんや」

ホッホチャンは手にとつて感心かんしんしたように眺ながめている。アイロンをかけるどくつつくなら、多分熱可塑性たぶんねつこせいせいのプラスチックプラスチックだろう。

ケ「キレイやる。ホッホチャンほしいか？」

ホ「そろ欲しいけど、お母おかあさんにアイロンかけてもらわんならんでしょ？」

ケ「作つくったげる、云いうてるやる」

ホッホチャンは、お母おかあさんのはなの顔を見ながら、お伺うかがいをたてる。

ホ「はな、手伝てつだつてやつてくれる？、かまへんの？」

というこで翌日、十五個持つてきてくれた。一つだけ弟の順之助のハート形のビーズ細工をそえて。

ケンチャンはヤマザキサンと一緒に、花屋でアマゾンリリーを買かつてきた。

花器はケンチャンにも気に入りそうなドイツ製のガラス器。人の顔の下の首のあたりに蝶ネクタイ。

ケ「この人、怒おどつてんのか？」



花材 アマゾンリリー

## アシタテンキニナール

二〇〇三年 六月

ホ「今日は夕焼けが綺麗やったね。ピンクやオレンジ。明日はきっといいお天気ね」

ケ「雨降ったら、どうすんねん？明日ボートに乗りに行こ、て云うてたやんか」

ホ「そう、雨やったらあかんね。そんなら雨降らんように二人でテルテル坊主作るか」

ケ「テルテルボーズ？」

ホ「知ってるでしょ。テルテルボーズ、テルボーズ。明日天気にしておくれ。ホッホちゃんも習った唄」

ケ「わかった！そしたらオジイチャマとこへ紙もらいに行こ。キレイな紙いっぱいもってはる」

オジイチャマの書斎にはケンチャンのほしい物が何でもあつたらしい。

ホッホちゃんとケンチャンは和紙の束を取り出してきて、水色と白のテルテル坊主を作った。

近くの花屋さんで柳の枝とガーベラを買ってきた。

ホ「雨雨降れ降れの唄習った？」

ケ「知ってるー！」

ホ「柳の枝に跳びつく蛙。これは知らないと思うけど」

ケンチャンは一年生になったけど二人の共通の話題は、まだこんなところである。テルテル坊主の効きめがあれば、明日はオジイチャマもボート漕ぎのお供らしい。

花材 ガーベラ シダレヤナギ



## スターウォーズ

二〇〇三年 九月

ケ「スターウォーズ行ってきた」

京都の国立博物館で、映画で実際に使った宇宙人の服装や、宇宙船の模型まで展示しているという。

ケ「スゴイでー、この人形おしいちやまに買っていただいた」

ホ「ヘーッ、何て名前の人なの」

ケ「エーッとな、箱に書いてある。おしいちやま読んで」

剣を持ったのがアナキン・スカイウォーカー、ピストルを両手に持っているのがジャンゴフェット。

ホ「どんなことしてはる人？、どっちが良い人？」

ケ「？、？、？」

話の筋はわからないらしいが、魅力ある映画だったようではある。

ケ「ホッホチャン、相談やけど、この人形の花買に行かへんか」

ホ「行ってもいいよ。スターウォーズやったらお星さんみたいな花がい  
いわね」

二人で出て行った。買ってきたのは瑠璃玉薊と銀河のような霞草。もう一種アリウム・ギガンテウムが欲しかったらしいが季節はずれ。

ホ「スターウォーズやったらレーア姫がいるでしょ。ホッホチャンのマグカップに、お月様に乗ったレーア姫がある。それでいいかな」

二人で何か相談しながらいけ上がった。アリウム・ギガンテウムがあれば、又違った感じになったかも。

花材 ルリタマアザミ カスミノウ



## モミジ見に行き！

二〇〇三年 十月

ホ「ケンチャン、去年の秋、真如堂へモミジ見に行ったでしょ」  
ケ「覚えている。沢山人が来た。また連れて行ってくれる？」  
ホ「ホッホチャンも行きたいなと思ってるの」  
ケ「今度はもっと遠い所あかんか？」  
ホ「それより、この間真つ赤な葉の木をいけたでしょ。名前教えてわね。」  
云「ってごらん」

ケ「エート、エート、？」

ホ「もう忘れたの？。あれは七龍 北海道から送られて来たの」

ケ「へーっ北海道！。一緒に行ったやんか。行こ、行こ」

ホ「そんな！。北海道は遠いのよ。それより周山へ行こか」

ケ「それどこ？」

ホ「京都の北の方。お山をいくつも越えて行くの」

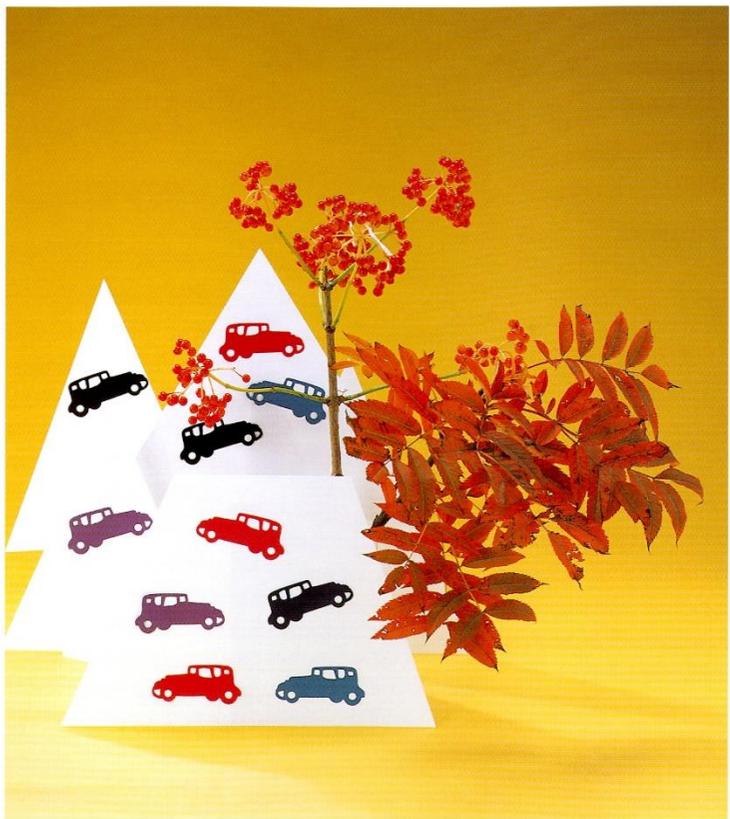
ケ「へーっ、どんなところやろ」

ホ「おじいちゃま！山を五つほど作ってよ。ケンチャンとモミジ見物に  
行く道をこしらえるの」

早速おじいちゃまは紙で山を作ってくれた。

ホ「山だけやったらあかんね。ホッホチャン自動車の切り絵持つてるから、道に貼りつけよ。それから紅葉買いに行こ」

そして二人で何とか、かとか言いつながら周山行の紅葉の山道ができた。



花材 ナナカマド ビバーナム

二階から落ちてきた雪ダルマ

二〇〇三年 十二月

ケ「アツ、雪だるまや！」

ホ「かわいい雪ダルマでしょ。オーノさんがロンドンで買ってきて下さったの」

ケ「お花とバケツ持っってはるなあ。お花いけてはったんやろか。そいで二階から落ちてきはったんとちがうか」

ホ「そんな感じやね」

ケ「そしたらホッホチャンがびっくりして、たすけにきはったとこや。この雪だるままでコーサク花できるやろ？」

ホ「手伝ってくれたらできる。まずお星様がいるでしょ。それからきれいな金色の針金。花は何にいけないかな」

ケ「一緒に行つたげる！荷物持ったげる」

二人で出掛けて行ったが中々帰って来ない。買ってきたのは真っ赤なマグカップと小型の胡蝶蘭にミリオクラダス。赤と緑の華やかなクリスマスカラー。

コーサク（工作花）ができたところで国立近代美術館へ。二十世紀初めのヨハネス・イッテンの造形芸術展を見に出かける。そこでケンチャンは、イッテンの画集を買ってもらった。何故かという、イッテンの絵で迷路遊びができるからだそうである。

陽射しのおだやかな初冬の午後。

花材 コチヨウラン ミリオクラダス



## ホッホチャンは申年さるどし

二〇〇四年 一月

ホ「ケンチャン、来年は申の年、ホッホチャンの年なの」

ケ「そやろと思てた。アハハ」

ホ「コラッ、何がおかしいの！」

ケ「お母さんも猿やで」

そして又笑っている。二人には同じように猿的などころがあるらしい。そのうちケンチャンが、

ケ「ホッホチャン、そんなら猿の工作花しよか」

ホ「うん、そしたらお正月用にのせられるから丁度いいと思う」

二人で考えはじめたが、猿の人形がうまくいかない。

ホ「そや、ずっと前和則オジチャンが、色んな動物作ってくれはったでしょ。頼んでみよか」

ケ「二階へ頼みに行ってくる」

ケンチャンは、しばらくおりにてこない。そのうち嬉しそうな声で下りてきた。

ケ「エーのができた。見せてほしいか」とかくしている。

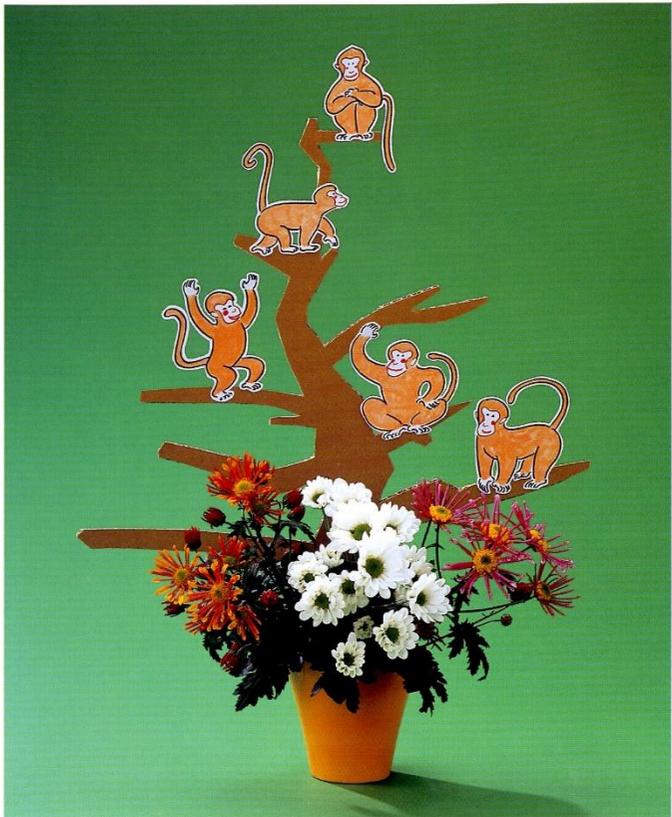
五匹の猿は段ボールを切り抜いた木にとまっている。それぞれ弟や両親らしい。

ケ「ホッホチャンはテッペンにしといたげたで！」

ホ「へエーッ、ありがとう。今度の水曜日、学校の帰りに寄る？四時から写真とりはじめるから」

ケ「猿ヨロコブやろな。ハッハッハア！」

花材 スプレーギク



## テンスウをつける

二〇〇四年 四月

ホ「ケンチャン、今週のお稽古のお花、ちよつと多かつたようね。来週は少し本数を減らしたげようか」

ケ「アカン！ 少なかつたらお稽古にならへん」

そこで、次の稽古は、アカシア三本、白花海芋三本、アルストロメリア二本。毎週月曜日、ケンチャンは学校の帰り道に六角の家に来て、お花の稽古をしている。帰ってくるとまず宿題。ホッホチャンが横について、きつちりやらされてる。

国語の朗読も宿題の一つ、

「いるか」

いるか いないか

いないか いるか

いる いる いるか

・・・・・・ 谷川俊太郎詩

かわいくていい詩だが、すらすらと読むのは難しい。朗読の宿題には点をつけなくてはいいけないらしい。ホッホチャンのつけた点数は八点。それからケンチャンの稽古したアカシアの盛花の方も八点。

金曜日、学校は週五日制なので、金曜日は六角の家に泊まりに来る。土曜日はホッホチャンの買い物か、オジイチャマの散歩のお供。品物選びも手伝ってくれる。作例に敷いた紙ナプキンはケンチャンの好みで買ったらしい

ホ「四月号の十二頁に紙ナプキンと同一ような風船使ってみようか」  
ケ「ヘエーッ、そんなことできるの？」

ホッホチャンは風船をふくらませて積み、黄色のプリムラ・ポリアンサをそえました。

花材 プリムラ・ポリアンサ



くも はなし  
雲の話

二〇〇四年 五月

庭で朝ごはんのあと、ケンチャンとホッホチャンが空を見上げている。

ホ「今日は空が綺麗やね。小さい雲がゆつくり動いている」

ケ「去年スイスへ行ったとき、ずっと雲の上を飛んでたな。宇宙の端まで続いていたで」

ホ「いいえ、雲は地球のまわりだけでおしまい」

ケ「ふうーん。そやけど今日の雲は小さいな。とってこられるかもしれないな。とってきたらホッホチャン喜ぶか」

ホ「とって来てくれたら嬉しいけど、ケンチャンのマンションの屋上からでも無理。かわりに雲の絵描ける？」

ケ「オジイチャマに紙もらってくる」

白と薄紫と空色の紙を切り抜いて空を見上げて形をくらべている。

ケ「あつ、動いたらあかん、うわーっ形が変わった。ホッホチャン、何とか云うて！」

一所懸命雲を切り抜いているうちに十枚ほどの雲が出来上がった。出来上がった雲で宇宙戦争が始まった。

ホ「雲はそんな凶暴なことはしないの。それより五月号のケンチャンの頁にこの雲を使った花をいけたげようか」

ケ「かまへんけど、こんな雲でもええのか？」



花材 カラー ツワフキ

## スパイダーマン

二〇〇四年 九月

ケンチャンが、しきりに台所の柱にとびついている。

ホ「何してんの、危ないからおやめなさい！」

ケ「スパイダーマンや」

お母さんと「スパイダーマン」の映画を見てきたそうだ。だがその真似は難しいらしい。しきりに紐を天井や壁に投じているが、どこにも引つかからない。

ホ「ぞう！ この間櫻さんにスパイダーマンのキャンディーを頂いたのでしょ。あの缶を持ってらっしゃい。ホッホチャンのスパイダーマンを作ったげるから」

ケ「——ン。あの缶、どっかへ行ってしもた」

横で話を聞いていた赤木さんが、私も持つてるからと、缶と一緒にスパイダーマン付きのストローも貸して下さった。そして蜘蛛の巣は、何か植物でオジイチャマが下請け。

スパイダーマンの配色は赤と青らしい。そこでバックは青、花は朱色のアマクリナム。白い目で赤い顔のキャンディーの缶の後に花を立て、蜘蛛の巣にスパイダーマンの人形をひっかけて出来上がり。

ホ「ケンチャン、これでどう？」

ケ「フトイ（太藪）の先はいらんのとちがうか？」

花材 アマクリナム フトイ



花

### 桑原素子 (くわはら もとこ)

1932年、桑原専慶流第13世家元、桑原専溪の長女として京都に生まれる。6歳より父専溪にいけばなの指導を受ける。1950年同志社女子高校卒業後、18歳より華道家として活躍。後進の育成と共に、NHK出演他、新聞雑誌で活躍。著書は『花ふたり』『花ふたり旅』(いずれも夫桑原仙齋共著)他。 2004年8月3日永眠。

### 文 桑原仙齋 (くわはら せんさい)

協力 桑原仙溪 (和則)  
桑原 櫻子  
星 はな  
星 健一郎  
星 順之助

カメラ 宇佐美宏 宮野正喜 伊藤望

## ホッホちゃんとケンちゃん

2004年9月19日 第一刷発行

編集・発行 桑原専慶流家元  
〒604-8164 京都市中京区六角通烏丸西入  
<http://www.kuwahara-senkei.com>

印刷 西湖堂印刷株式会社



「桑原専慶流いけばなテキスト」1999年12月号掲載

#### 登場人物

ホッホちゃん	.....	ケンちゃんのお祖母 <sup>おばあ</sup> ちゃま
オジイチャマ	.....	ケンちゃんのお祖父 <sup>おじい</sup> ちゃま
和則 <sup>かずのり</sup> オジちゃん	.....	ケンちゃんのお父 <sup>おとう</sup> さん
櫻 <sup>さくら</sup> さん	.....	ケンちゃんのお母 <sup>おは</sup> さん
はな (ママ、お母 <sup>おは</sup> さん)	.....	ケンちゃんのお母 <sup>おは</sup> さん
ケンちゃん	.....	ケンちゃん
ジュンクン	.....	ケンちゃんのおとう <sup>おとうと</sup> の弟



スイス、シオン城にて。松尾氏撮影。